

随想

長島の段々畑



鳥越 武徳

出水市文化協会

私は時々ふらりと長島へ誘われてドライブする。黒之瀬戸架橋を渡ると、ガソリンスタンドのある三文字を左折して、国道三八九号線を走ること五分。坂道を登り切った峠に出ると、眼前に広大な東支那海の一大パノラマが忽然と

迫ってくる。川端康成が「雪国」の冒頭に「トンネルを過ぎるとそこは雪国であった」あの感動と同様、「峠を越えるとそこはアジアの海であった」と叫びたくなるほどの景観である。まさに「アジアの海」なのである。パノラマの右側には海原に天草の島影を控えながら、長島の赤茶けた色の段々畑が連綿と連なる。「絶景」とはこのことかもしれない。車を止め車外に出る。深呼吸をしながら、しばしアジアの海を体内に吸い込む。道路端に車を止めて、あたりを見廻してみても、どこにも駐車場らしき場所が見当たらない。長島の地元の人々にとっては、こんな絶景ですら普段の景色であって、ことさらに外来者のための駐車場なんて、思考のなかにないのであろう。

あの美しい段々畑は「汐見」という地名であろうか。地名の如く、まさに大海を見おろす「汐見」の地なのだ。南を見渡せば彼方に甌島が望まれる。

段々畑の中に農道が走る。空地に車を止め、しばし散策する。この地は長島独特の粘土質の畑で、山に大木がないので、湧水源がなく、稲作の田んぼに適さず、殆どが畑である。だから、棚田でなく、段々畑なのである。

昔の人々はこのようにしてこの段々畑を造ったのだろうかと、散策しながら想いは遠い時代へとさか登っていく。丘の斜面の高い方を崩しながら、崩した土を低い方に積み重ねつつその土を盛りながら土留めの石を重ねて石垣を造っていく。畑の土が水平になったところで畑造りは完成する。そうして造られた畑が幾段も幾段も丘の斜面に重ねられて、段々畑となる。

昔の島は貧しかった。貧し過ぎて家族を養うこともできなかった。食糧飢饉でたまりかねて島を捨てて島外へ出て行く人も多かった。娘の身売りや行方知らずの人もいた。「口減らし」という悲しいことばがあった。食べる人口を減らしていくことを意味する。

る。

私は、積み上げられた石垣の石の一片片を撫でながらじつと見つめる。今、私の手の石は、何時、誰が、どのようにして、どんな思いでここに積み重ねたのか、私にはわからない。でも私は知りたと思う。家族を救うために一坪の畑でも欲しかった。男は丹念に石を見て、石の個性に合わせて盤石の石垣を造っていく。ただ一ツとして同じ形の石は無いのだから、男は石と対話するように、幾何学的に組み合わせる積んでいく。これは造形の美術ですらある。この芸術は人に見せるためのものでなく、生きるための島民の生きざまそのものであった。石垣は、無学な人々が、経験だけを頼りとした知恵で造られた傑作である。

近頃、美術館や博物館、民俗歴史資料館など箱物ホールが多い時世、長島の段々畑はそれらに決して引けを取らぬ自然の中の立派な造形美を啓示している。長島の人々はもっとこれを誇りにして欲しいし、そのことが苦労された先祖への供養ともなるし、それが文化というものではないだろうか。

段々畑と天草との間の海峡には、音もなく流れも見えず、静かに潮が動いていく。海峡を眺める指江の道の駅に、石造りの歌碑があった。

海原も天草島も夕映えて海峡の潮わずかに動く
竹之内重信
その潮の動めく指江の海岸には、幾多の古墳群が潮騒を聴きながら静かに眠っている。
石積み古墳に咲くや石路の花
長島は貴重な「夢」の島である。

